

第 75 回歴史探訪の会

「終焉の地・小栗栖を訪ねて明智光秀を偲ぼう」

実施日： 2020 年 10 月 21 日

場所： 京都市山科区、伏見区

案内人： 林 寛

コース： 京都市営地下鉄小野駅(集合)～明智光秀胴塚～北小栗栖天神宮～折戸公園
(昼食)～明智藪～本経寺(光秀供養塔)～小栗栖八幡宮～天穂日命神社～地下鉄石田駅
(解散) 歩行程 約 7km

醍醐地区には 3 つの歴史探訪コースがある。太閤秀吉の花見で有名な醍醐寺ほかを巡る「醍醐ルート：太閤の道しるべ」、親鸞聖人の生誕の地を巡る「日野ルート：親鸞の道しるべ」、そして今例会で巡った「小栗栖ルート：明智の道しるべ」である。好天に恵まれた秋の一日、15 名が参加して明智光秀公の無念を想いながら、終焉の地・小栗栖を訪ねた。

【本能寺の変と四国説】

天正 10 年(1582)6 月 2 日早朝、明智光秀は本能寺の織田信長と二条城の嫡男信忠を討った。なぜ光秀が？400 年以上にわたる謎である。野望説、怨恨説、各種黒幕説などが議論されてきた。最近「四国説」が重要な原因として取り上げられている。

土佐の長宗我部元親は、織田信長から四国支配に関するお墨付きを得ていた。両者の間を取り持ったのが明智光秀と、光秀の重臣斎藤利三(としみつ：徳川三代将軍家光の乳母 春日局は利三の娘)である。斎藤利三は長宗我部元親の義理の兄にあたる。ところが、天正 9 年秋ごろから信長の方針が変わり、阿波を信長に臣従する三好康長に、讃岐を信長の三男信孝に与えようとする。斎藤利三は長宗我部元親に織田信長の方針を伝えて従うようにと説得を試みるが、元親が納得せず、ついに織田信長は四国征伐の軍を起こす。三男信孝と宿将丹羽長秀が軍勢を引き連れて岸和田から海路四国へ渡ろうとしていた。出発は天正 10 年 6 月 3 日。本能寺の変は、まさにその前日に起きた。光秀と利三は、何としても長宗我部元親征伐を阻止したかったのだろうか。

【明智光秀の最期】

本能寺の変からわずか 11 日後の 6 月 13 日、明智光秀は、驚愕の中国大返しを果たした羽柴秀吉に山崎の合戦で敗れた。光秀が信長から付けられた与力大名、丹後の細川藤孝や大和の筒井順慶が光秀軍に参陣しなかったのが痛かった。明智光秀は勝龍寺城(京都府長岡京市)に退いたのち、夜陰に紛れて数名の近臣らと居城坂本城を目指して落ち延びていった。途中、山科小栗栖に差し掛かった時に竹藪から竹槍の襲撃に会い、その場で落命したとも、しばらく進んだところで側近に首を討たせたとみられる。襲ったのは小栗栖の武士集団である飯田一党という。天下人の何とも儚い最期であった。

【小野駅集合】

明智藪へはひと駅隣の地下鉄醍醐駅が最寄りであるが、今回は、光秀の胴塚にお参りしたかったので小野駅集合とした。集合時間は、コロナ禍でありラッシュ時間帯を避けるために、9月例会同様10時30分とした。「京都SKY観光ガイド協会」のガイドさんに案内をお願いした。また、出発に先立って、全員、手を消毒した。ガイドさんの紹介と、簡単なコース説明のあと15名が出発。

【明智光秀胴塚】



小野駅から10分ほど南に歩くと、府道沿いの一角に明智光秀の胴塚がある。明智藪で襲撃を受けた光秀は、このあたりまで来たところで死を覚悟し、側近の溝尾庄兵衛に介錯させて自刃したという。庄兵衛は首を隠し、遺体を郷民が埋葬した。しかし首はすぐに敵兵に見つかり、遺体も掘り出されて、信孝と秀吉が6月15日に本能寺の焼け跡に晒した。さらに、首と胴体は繋ぎ合わされて、京都の粟田口に磔にされたという。なんとも惨い話である。



首塚は本来一つのはずだが、明智光秀の首塚は3カ所にある。ひとつは京都市・梅宮社祠、もうひとつは本能寺の変の起点となった亀岡市の谷性寺(こくしょうじ)、3つ目は光秀の娘玉が嫁に行った細川忠興の居城がある丹後宮津市の盛林寺(せいりんじ)。

胴体が埋葬された「胴塚」が山科のこのあたりにあったとの言い伝えがあり、昭和45年、光秀を慕う地元山科の有志がこの地に胴塚を建立した。皆で合掌。

【北小栗栖天神宮(きたおぐりすてんじんぐう)】

胴塚から北小栗栖天神宮まで府道に沿って10分ほど歩く。左側の車道は乗用車やトラックが行きかい交通量が多い。後で分かったことだが、明智光秀は、この道を私たちとは逆方向に坂本城に向かって落ち延びようとしていたらしい。





大鳥居の向こうは急な石段、数えたら 100 段あまりあった。コロナ禍で自粛、運動不足の身にこの石段はきつい。少し回ったところに上りの坂道もあり、階段の苦手な人は坂を上った。

北小栗栖天神宮の祭神は伊佐那岐命と伊佐那美命。火災のため創立の年代は分からない。口伝によれば、天智天皇の御代(670 年ごろ)に藤原鎌足の長子 定慧(じょうえ: 藤原不比等の 16 歳年上の兄)が創建したと伝えられる法琳寺の鬼門除けに、この地に

天神社が建立されたとのことである。以来 1300 年余り、当天神宮は北小栗栖の産土神として地元の人々の崇敬を受け、親しまれている。私たちはお参りの後、しばし一服。石段きつかったなあ・・



参拝のあと 15 分歩いて、醍醐駅近くの公園で昼食休憩。元気が出たところで、今日の本命 明智藪に向けて出発。南流する山科川を右手に見ながら歩を進めた。



【明智藪】

明智藪という名前から、周りはすべて竹藪と想像していたが、着いてみると結構開けていた。先の台風でたくさんの竹が倒れて、危ないから切ったとのこと。竹が鬱蒼としていたころは不気味で、通るのも怖かった、と地元の人が語ってくれた。

明智光秀を討ったのは小栗栖の武士集団 飯田一党である、と説明板に書いてある。飯田一党の末裔の飯田さんが現在もこの地に住んでおられる。幸運にも私たちは、明智藪でその飯田さんから説明を聞くことができた。明智藪の真向かい、たくさんの竹の切り株が残る小高い丘が小栗栖城跡という。一説には小栗栖八幡宮が小栗栖城跡との資料もあるが、それは間違いとのこと。小栗栖城主は飯田氏で、明智藪の真ん前にある小栗栖城から出撃したのだろうか。私たちは飯田さんの熱心な説明に聞き入ったが、気がついたらいっぱい蚊に食われていた。“明智藪蚊”だ。昔も今も、ここは“刺される場所”らしい。全員で記念写真を撮った。





全員で記念写真(向かって社友会旗の右隣が飯田さん)

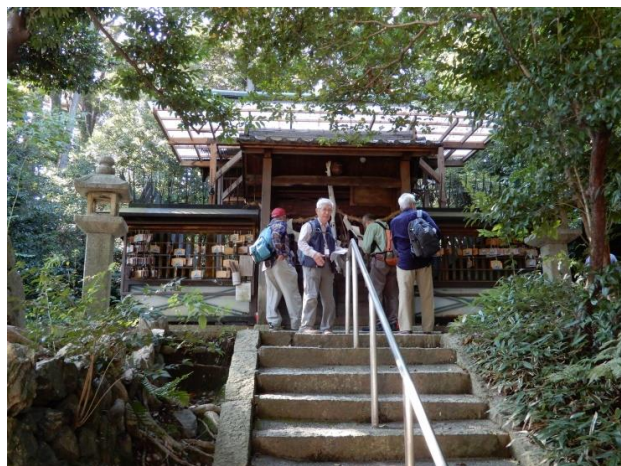
【本経寺(ほんきょうじ:光秀供養塔)】

明智藪は本経寺の境内にある。久遠山本経寺は日蓮本宗の寺である。平成10年6月、ご住職が境内に供養塔を立て、悲運の武将明智光秀公に供養を捧げて歴史の一端を伝えている。

石碑には、「明智日向守光秀公供養塔」とある。



【小栗栖八幡宮】



本經寺から5分ほど住宅街の緩い坂道を下ると小栗栖八幡宮の赤い鳥居に至る。ここが小栗栖城跡との情報があるが、先ほどの飯田さんの説明の通り、それは間違い。神社の祭神は、応神天皇、仲哀天皇（応神天皇の父）、神功皇后（仲哀天皇妃、応神天皇の母）。神社の創建は平安時代の貞観4年（864）、紀興道が男山八幡宮の分霊を勧進して創建した。室町時代から江戸期まで飯田氏が神主を勤めた。



神社の下は八幡宮公園になっていて、公園奥に子安地蔵の祠がある。安産のご利益があるという。日本三体地蔵のひとつといわれ、たくさんのよだれかけがかかっている、地元の人たちの信仰の厚さがうかがえる。公園でしばし休憩をとった。



八幡宮公園でつかの間の休憩を取り、本日最後の訪問地 天穂日命神社に向かう。15分の行程のところ、道を間違えてちょっと歩き疲れた。

途中、山科川をわたる。本日4回目の渡河（出発直後、昼食前、昼食後、そして今）。

晴天の昼下がり、川面が輝いてまぶしかった。

【天穂日命神社(あめのほひのみことじんじゃ)】

祭神は、天穂日命。古事記によれば、須佐之男命が天照大御神から5つの玉の緒を受け取り、聖水をふりかけ、口の中で粉々に噛み砕き、霧状の息を吐き出すと5柱の男神が生まれた。その中の1柱が天穂日命だったという。葦原中つ国の平定のために、八百万の神々から最初に遣わされたのが天穂日命であったが、大国主命に媚びへつらって3年経っても報告をしなかったという。

当神社は延喜式神明町に載る天穂日命神社に比定される。現在の本殿は天明3年(1873)の造営である。正面の柱間が2間という、京都市内ではほとんど例を見ない二間社流造形式の建物である。閑静な境内は「万葉集」などの和歌の名所「石田の杜(いわたのもり)」とされ、神社の入口には歌碑が建っている。(参考までに、最寄駅は石田(いしだ)駅である)

ここでも幸運があり、私たちが神社境内に入ると、神社を管理している氏子の方がちょうど来ておられて、普段は施錠している祠を開けてくださったので、私たちは祠の中に入って参拝することができた。



コロナ禍で自粛がちの毎日だったが、快晴の秋の一日、明智光秀の最期を偲びつつ史跡を探訪することができ、天穂日命神社の参拝で締めくくった。